

表現に即して内容を読み取る力を身に付ける古典授業の改善
～思考過程・思考結果の共有化を通して～

福島県立安達高等学校 教諭 加藤 裕美

1 研究の趣旨

新学習指導要領は、小学校から一貫して言語文化の指導の充実について言及している。古典は我が国の歴史の中で創造・継承されてきた言語文化そのものであり、人生を豊かにする上でも、古典を読むことには深い意義がある。しかし、自らの授業を振り返ると、文法・語句の指導に偏りがちで、生徒が主体的に学び、古典を読む力を身に付けていたとは言い難い。そこで、生徒が主体的に学び、表現に即して内容を読み取る力を身に付けさせるため、以下のような仮説を設定した。

古典指導において、以下の(1)～(3)の手立てを講じれば、生徒は表現に即して内容を読み取る力を身に付けることができるであろう。

- (1) 二つの古典の読み比べ
- (2) 古典についての評論文の活用
- (3) 思考過程・思考結果の共有化

2 研究の概要

授業は「第一次の読み」と「第二次の読み」の二段階構成とした。「第一次の読み」では文法・語句の指導を主として行う。「第二次の読み」では、もう一つの古典作品との読み比べを行わせた後、古典に関する評論文を活用させた。授業実践は、研究協力校の第3学年77名(2クラス)を対象として行った。

(1) 授業実践Ⅰ 「能登殿の最期」(『平家物語』)

本単元では『平家物語』に登場する武将の人物像に迫ることをねらいとし、能登殿と対照的な人物である宗盛を描いた部分との読み比べをグループで行わせた。更に、評論文教材『文車日記』(田辺聖子)を読み比べ教材の一つとして活用し、能登殿と同じく勇猛な武将として描かれる宗盛について学ばせた。単元のまとめとして『平家物語』の人物論を書かせた。

(2) 授業実践Ⅱ 「道長の豪胆」(『大鏡』)

本単元では、「道長の豪胆」が持つ表現の特徴を読み取ることをねらいとし、『大鏡』と同じ歴史物語でありながら、道長に対する視点が対照的な『栄花物語』との読み比べをペアとグループで行わせた。更に、評論文教材『大鏡の人びと 行動する一族』(渡辺実)を参考資料として活用し、「道長の豪胆」の紹介文を書かせ、単元のまとめとした。

3 成果と今後の課題

(1) 成果

授業実践Ⅱの際、「第一次の読み」終了後と、「第二次の読み」終了後の二度に分けて、生徒に自己評価を書かせたところ、「第二次の読み」終了後は、自己評価の記述量が増加し、記述内容にも充実が見られた。また、授業後に実施した「二つの古典を比べながら読む活動は、内容理解につながりましたか」というアンケートに、対象生徒全員が、読み比べは内容理解につながったと答えた。このことから、読み比べは古典作品への理解を深め、表現に即して内容を読み取る力を身に付ける上で有効であることがわかった。また、同アンケートにおいて、多数の生徒が「授業の中でほかの人の意見を聞くことは参考になる」と答えており、「会話をしながら理解を深めていくのが楽しかった」などの記述が見られた。このことから、思考過程・思考結果の共有化は、生徒の学習意欲を高める上でも有効であると言える。更に、生徒が授業のまとめとして書いた文章の中には、評論文を読むことで身に付けた視点で書かれているものが見られたことから、評論文の活用は古典作品を読む際に役立つ視点を学ばせる上で、有効であることがわかった。

(2) 今後の課題

- ① 読み比べ教材の開発
古文と漢文の読み比べや、漢文同士の読み比べなど、読み比べ教材を開発したい。
- ② 評論文教材の活用
更なる効果的な評論文教材の活用法について、教材開発と併せて検討したい。
- ③ 評価の工夫
評価問題作成を含め、読み比べなどの活動を評価する工夫について更に研究したい。